

自己有用感と最上級生としての自覚をはぐくむ指導の工夫 ～総合的な学習の時間「後輩に教えようプロジェクト」の実践を通して～



伊勢崎市立あずま小学校
教諭 長沼 明典

1 はじめに

「最上級生としての自覚をもちましょう！」「下級生の見本となり、学校のリーダーとして行動しましょう！」これは、6年生が、教師によく言われる言葉である。学校全体の教師がそうあってもらいたいと願う「最上級生の理想像」である。しかし、このような意識や態度は、6年生になったからといって育つものでもなく、教師に言われたからといって身に付くものでもない。これまでの学校生活や最上級生としての経験などを通して、はぐくまれていくものである。

本校でも、児童は高学年になるにつれてクラブ活動や委員会活動などに参加したり、6年生になると諸行事の準備を任されたりするなど、学級や学年を超え、徐々に学校全体に関わる活動を体験するようになっていく。

本校では、こうした活動などに加え、「たてわり活動」と称し、1～6年生で編成したグループで遊ぶ異学年交流活動を行い、人間関係づくりの経験とともに、上級生の自覚をはぐくむ取り組みも行ってきた。この「たてわり活動」は、6年生がリーダーシップを取り、低学年から高学年までがふれあひながら一緒に遊ぶ活動である。6年生は総合的な学習の時間を使って、下級生が「楽しかった」と満足するであろう活動内容を企画・準備し、実施・運営するものであった。年間10回ほどの活動であるが、下級生も、リーダーシップを取る6年生の姿を見ながら、上級生のイメージを膨らませることができる活動となっていた。

ただ、この活動の中では、6年生全員がリーダーとして活躍できる場面が少なく、中心的に活躍する一部の6年生に偏ってしまう傾向にあった。また、年齢幅の広い下級生全員を満足させる活動の企画は難しく、下級生からの評価には、満足の声はあるものの、満足度の低い声が返ってくる場面もあり、6年生の達成感や満足度は十分ではなかった。さらに、活動内容が遊びであったのも下級生の満足度や6年生の達成感が不十分であった一因であると考えられた。

そこで、6年生一人一人がリーダーシップを発揮する経験ができ、さらに下級生の満足度をより高く得られる活動はできないものかと考えた。それが本実践の「後輩に教えようプロジェクト」である。本校では、平成26年度より、この学習活動を6年生の総合的な学習の時間の中に取り入れ実践している。この学習活動は、6年生自身がこれまでの小学校生活の中で、身に付けてきた知識や技能、学習経験などを活かし、各学年の要望に応じて、教科の学習等においてマンツーマンで教えていくという内容である。例えば、「3年

生は習字を初めて習うから、基本を教えてあげよう」など、教える内容についても、6年生自身がこれまでの経験から発案でき、自分たちが身に付けてきた知識や技能を活かしながら、自信を持って下級生を指導できる活動となっている。そして、このふれあいの中で下級生が見せる表情や言葉は、6年生への直接の評価となり、「役に立ててよかったな」といった自己有用感を味わわせることができるとともに、全下級生との関わりを通して、6年生一人一人に最上級生としての自覚をはぐくむことができる活動になっている。さらには、下級生にとっても6年生とふれあいながら教えてもらえることで、最上級生を身近に感じ、あこがれや感謝の気持ちを抱くことができる活動にもなり得ている。このように本校では、この活動を軸として、6年生を最上級生として育てていこうという意識が学校全体でできている。

以下、今年度の取り組みを中心に、本実践「後輩に教えようプロジェクト」が、6年生一人一人に自己有用感と最上級生の自覚をはぐくむ上で有効であるということについて述べる。

2 実践の内容

(1) 本実践のねらい

総合的な学習の時間において、6年生が1年生から5年生の各学年に対して「後輩に教えようプロジェクト」を実践することを通して、総合的な学習の時間のねらい達成とともに、自己有用感と最上級生としての自覚をはぐくむことができることを明らかにしていく。

(2) 本実践で目指す児童像

本実践では、以下のような児童の姿が見られることを目指していく。

① 自己有用感を感じている姿

児童の表情、つぶやき、そして行動の中に、「自分は役に立てた」「やってよかった」という満足感があらわれている。さらに、実践後の振り返りの言葉の中にそのような感想を表現している。

② 最上級生としての自覚を持った姿

下級生のために、教える内容について吟味したり、教える手順などを考えたりする行動が見られる。また、下級生に思いやりを持って接することができる。そして、実践後の振り返りに下級生を思う表現や最上級生としてがんばっていこうという意欲を表現している。さらには、「下級生の手本になろう」という日常の行動が見られる。

(3) 実践の計画

① 全校の協力体制について

本実践は、6年生（3クラス91名）が全下級生に教えに行くという実践になるため、全学年の教師に本実践の趣旨を説明し、協力体制を整える必要がある。

具体的には、各学年で学習指導の際に、6年生による個別指導が効果的であると思われる学習内容等について、あらかじめ相談しておいてもらう。

②実践の構想および計画

本実践は、6年生になった児童が「自分たちが下級生にしてあげられること」という課題をもとに、その解決方法を児童自ら考え、実践し、振り返るという問題解決的な学習過程（つかむ・計画する・追究する・振り返る過程）を組み、児童の主体的な学習になるように計画する（表1）。

具体的には、新年度の4月、最上級生になり新鮮な気持ちを持った6年生に「最上級生として下級生に何をしてあげられるかな？」という投げかけをし、学習をスタートする。その際に、自分たちのこれまでの経験を振り返りながら、「〇年生には〇〇をしてあげたい」というそれぞれの思いを出し合いながら、実現可能なものに絞り込み、リストアップする。

そして、そのリストを各学年の教師に手渡し、6年生の思いと各学年の教師の要望とをすり合わせ、実施可能な内容として検討してもらい、実施日時を決定する。

次に、その学年で検討してもらった内容を各学年からの要請として、6年生に伝えていく。これを受け、6年生は自ら指導内容について各学年の教師にインタビューに行ったり、教え方について相談したり、練習したりするなど、その課題解決に向け児童主体で準備を進めていく。そして、実践後、自分の取り組みを振り返る。こうした一連の学習を1年生～5年生のすべての学年で経験していくのである。

この実践を1学期で完結できるように計画し、6年生は総合的な学習の時間（全12時間計画）と教科等の時間で実施し、他学年はその内容により教科等の時間として実施する。

そして、1学期間にすべての学年に関われるように実践を行うことで、それ以降の学校生活の中で、6年生が最上級生として、この実践の成果を活かせるようにする。

③実践の評価について

上記のような実践の中で、児童の表情やつぶやき、そして行動について見取り、成果の有無を探っていく。また、実践後にアンケートを実施し、自己有用感とともに最上級生としての自覚の高まりについて評価する。

表1 実践計画

月	学習過程	主な学習の流れ
4月	つかむ (総合1時間)	●最上級生として各学年にできることを考える ●各学年の教師に思いを伝える
5月	計画する ↓ 追究する ↓ 振り返る	①学年からの要請を聞く ↓ ②教える内容の確認・計画・準備 ↓ ③教えようプロジェクト実施 ↓ ④取り組みを振り返る
6月	(各学年とも総合2時間ずつ) (必要に応じて教科の時間を充てる)	2年生 ① ② ※各学年とも①～④の取り組みを繰り返す ③ ④ 3年生 ① ② ※各学年の実施順・実施期日は各学年の要請に応じる ③ ④ 4年生 ① ② ③ ④ 5年生 ① ② ③ ④
7月	振り返る (総合1時間)	●全取り組みを振り返る

3 本実践の実際

以下、本実践の学習過程「つかむ」「計画する」「追究する」「振り返る」の順で、後輩に教えようプロジェクト」の実際について記述していく。

(1) 「つかむ」過程

4月当初から、「入学式」や「1年生を迎える会」、「委員会紹介」など、全校児童の前面に立って活躍する経験をした6年生たちは、「最上級生になったという実感」や「まわりからの期待感」などをひしひしと肌で感じている様子であった。

そこで、6年生3クラスともに、総合的な学習の時間に、図1のようなワークシートを用い、下級生のために自分たちができることについて考え、話し合う活動を行った。

この中で、児童は「まだ、ひらがなを全部読めない1年生に読み聞かせをしてあげたいな」「2年生は、かけ算が難しいんだよな」など、自分のこれまでの小学校生活をそれぞれが振り返りながら、意欲的にアイデアを考えている様子が発言やワークシートなどからうかがえた。

その後、各学年の児童に実際に教えられるものについて、グループ、そしてクラス全体で話し合った。どのグループも実際の場面を想像しながら、真剣に話し合う姿が見られた。

そして、児童が考えた内容を各学年の教師に、実現可能かどうか検討してもらった。その中には各学年の教師が事前に考えていた内容も入っており、児童

6年総合的な学習①

後輩に教えよう

組 _____ 番 _____ 名前 _____

みなさんは、この学校で最高学年になりました。小さい学年の子たちから見ると、みなさんは、いろいろなことができるお兄さんお姉さんです。小さい学年の子が初めてやる勉強、それから運動や遊びなど、お兄さんお姉さんとして、やさしく教えてあげられることはたくさんあるでしょう。

先輩として、後輩に教えてあげられることを考えてみましょう。

■こんなことを教えてあげられそうかな (自分の考え) **長なわ(1,2,3年)**
 おにごっこする(1年) ひらがなを教える(1年) ドジボツ(4,5年)
 さいほう(5年) 本を読んであげる(1年)
 かけ算(2年) 習字を教える(3年)

■みんなの考え (仮) **後輩に教えようプロジェクト**
 字・文(1年) 友だちの作り方(1年) 2km走(5年)
 読み聞かせ(1年) 遊び(お七カ) (全) お絵かき(1年)
 ミシン(5年) 折り紙(1,2年) こたぎ学習(全)
 習字(3年) カリ算(3年) 上毛カルタ(1年)
 かけ算(2年) 結果の食べ方(1年) 敬語(全)
 玉止め玉結び(5年) (エツ)
 国語辞典(3年) 道具の使い方(1年)
 短距離(4年) ねん土(1年)

↓

後輩に教えようプロジェクト (実際にできそうなこと)

1年 読み聞かせ 4年 上毛カルタ こたぎ
 2年 かけ算 5年 玉結び玉止め、ミシン
 3年 習字 全 敬語

図1 ワークシート①

自ら考えた内容を実現できる学習の道筋ができた。表2は6年生全体が考えた下級生に教えられそうな内容である。

表2 6年生が考えた下級生に教えられそうな内容

学年	6年生が考えた内容
1年生	遊具などの遊び方・ひらがな・読み聞かせ・鍵盤ハーモニカ・水泳
2年生	かけ算の暗唱・なわとび・水泳・読み聞かせ
3年生	習字・国語辞典の引き方・リコーダー・分度器の使い方
4年生	漢字辞典の引き方・ことわざ・上毛カルタ
5年生	敬語・家庭科（玉結び・玉止め）・ご飯とみそ汁の作り方・臨海学校のダンス

その後、児童からは「先生、決まった?」「まだ、返事が来ないの?」と、各学年からの要請を楽しみにする発言が

多く聞かれた。「総合の時間が待ち遠しい」という発言も多く、その関心や意欲の高さがかげえた。

(2)「計画する」過程

各学年からの要請は、一つの学年への実施（「計画する」「追究する」「振り返る」）がいったん終わった後で、次の学年の要請が来るようにし、児童自身の振り返りが、次の課題解決に活かせるようにした。表3は、各学年からの要請および実施時期である。

表3 各学年からの実際の要請と実施時期

学年	実施期日	要請の内容
3年生	5月中旬	一人一人に習字の基本を教えてほしい!
1年生	5月下旬	一人一人に読み聞かせをしてほしい!
4年生	6月上旬	一人一人に漢字辞典の3つの引き方を教えてほしい!
5年生	6月中旬	一人一人に玉結び・玉どめを教えてほしい!
2年生	6月下旬 (晴天日)	一人一人にプールの楽しさを教えてほしい!

以下、3年生への実践「3年生に習字を教えようプロジェクト」を中心に実際の様子を記述していく。

「後輩に教えようプロジェクト」の実施について、今か今かと待ちわびていた児童に、3年生から「一人一人に習字の基本を教えてほしい」という要請が来たことを伝えた。これを聞いた多くの児童は、「よし!がんばるぞ!」という意欲を示した。しかし、中には「俺、習字は自信がないんだよな」と、不安な表情を見せる児童もいた。そこで、この要請に対して「どのような準備をしたらよいか」と問いかけると、「練習がしたい!」と前向きな発言が返ってきた。その後、「何の字を書くのか」「何を教えたらいのか」と、自分たちの活動内容について具体的に知りたいという発言が多く出てきた。「一人一人」、つまり、マンツーマンで教えるということが、それぞれに、実際の場面を想像させ、何をすれば期待に応えられるか等、自分の問題として考えることにつながった様子であった。

そこで、3年生の教師に「自分たちが教える具体的な内容」について、インタビューし、それをもとに対策を練ろうということになり、すぐに学級委員がインタビューに向かった。学級委員は「3年生は習字が初めてなので、道具の出し方、片付け方、そして、字は基本

の「一」を教えてください」という内容を伝達した。不安な表情をしていた児童も、「一なら書けるぞ!」と、一変、意欲的な表情に変わり、その内容について身を乗り出して聞いていた。

その後、実施日までの対策(計画)を全員で話し合い、習字の時間に実際に道具の出し方や片付け方を確認すること、3年生役と6年生役になって教え合う練習をすることなどを決めていった。この話し合いでは、課題解決に向けて、全員が意欲的に考えられたことが発言やワークシートの記述からうかがえた(図2)。

(3)「追究する」過程

自分たちで立てた計画をもとに習字の時間に道具の確認を行った。そして、全員の児童が「一」の字を練習した。どの児童もいつもの取り組みに比べて、じっくりゆっくり書き、表情も真剣であった。教え合う練習

では、となりの児童とペアになり、「筆の入りは10時の方向から、止めはグッと筆に力を入れる」と、仮想3年生に向けて、分かりやすくなるであろう言葉も掛け合いながら練習していた。どの児童も自分が教える場面を想像して取り組んでいる姿が見られた。練習後は、一人一人が自分なりに教えるコツやポイントなどをワークシートにまとめることができた。

実際の実施日は、6年生が3年生の教室に出向き、3年生の机のとなりに立って教える形を取った。初めは、6年生も3年生もお互いに緊張した表情であったが、いざ指導の場面になると、自然と打ち解けた雰囲気となった。「では、まず、お兄さん、お姉さんに、書いてもらいましょう」という3年生の先生の指示で、6年生が自信を持って書く姿を見せると、3年生は「上手!」「すごい!」と感心したり、拍手したりする反応を見せた。

(図3)。6年生にとっては「一」という単純な字であるが、3年生にとっては初めて書く字である。6年生が考えていた以上に、3年生の反響があり、6年生は、自分の字をほめられたことで、照れる児童、得意げな表情

6年総合的な学習①

後輩に教えようプロジェクト

組 番 名前

■プロジェクト名
三年生に習字を教えるべし!

■作戦日 5月19日(木) 6時間目

■作戦のテーマ
「ひり」「ひか」
三年生に習字の基本動作を伝える。

■作戦までのスケジュール(練習など)

- ①三年の先生に教え方をインタビュー(学級委員)
- ↓
- ②練習(渡辺先生にたのむ(佳))
- ↓
- ③本番

■練習してみて(工夫点)

- ・はね止め、けらいを注意しておしえる。
- ・ぼくじょうをつけずないようにする。

図2 ワークシート②



図3 3年生に教える様子

をする児童様々であったが、どの児童も自信を持った様子であった。そして、3年生の手を取り、筆の持ち方や筆の入り方など教える際には、全員の児童が3年生に向けて優しい表情や優しい言葉がけをすることができていた。この活動の終わり際には、3年生個々から6年生それぞれにお礼の言葉があった。6年生も3年生も満足そうな表情をしていた。

(4)「振り返る」過程

実施直後は「つかれた」と、つぶやく児童が多かったが、表情は満足感であふれている様子であった。実施後の感想には、「3年生はがんばっていた」「これからも習字をがんばってほしい」と、3年生の取り組みをほめる表現や、今後を見守ってあげたいなという最上級生として下級生を思う気持ちを表現している児童が多くいた(図4)。また、ほとんどの児童が「ありがたいって言われてうれしかった」「また、教えてあげたい」など、自分の取り組みを肯定的にとらえ、自分が役に立った喜びを口にしていた。

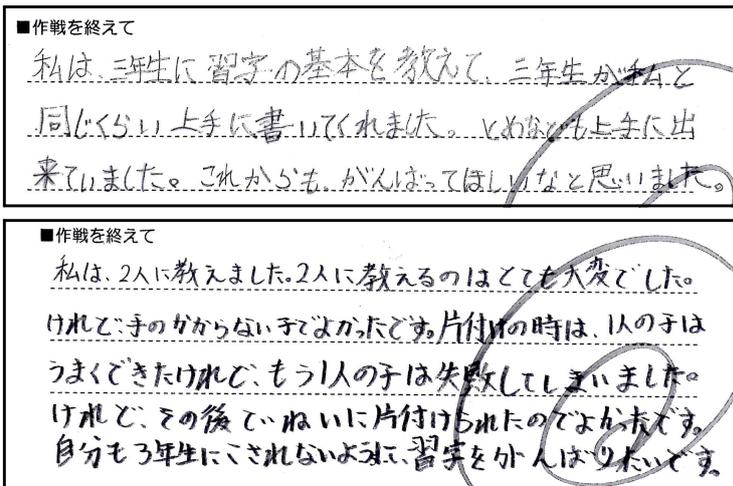


図4 児童の感想

(5) その他の学年への取り組み

その他の学年からの要請についても、6年児童は意欲的に取り組んだ。図5は、「1年生に読み聞かせをしてあげよう」「2年生とプールで遊ぼう」のプロジェクトの様子、次頁図6は「4年生に漢字辞典の3つの引き方教えよう」「5年生に玉結び・玉止めを教えよう」の様子である。

1年生・2年生に対しては、1年生が好むと思われる本を選んだり、2年生が水を楽しめるようにプールでの遊びを考えたり、学校のお兄さんお姉さんぶりを発揮する取り組みであった。

4年生・5年生に対しては、学年が近いこともあり、緊張感を持って取り組んでいた。また、教える内容も技術的なことを伴うため、これまでにその技術の習熟が甘かった児童も、お互いに確認し合ったり、練習し合った

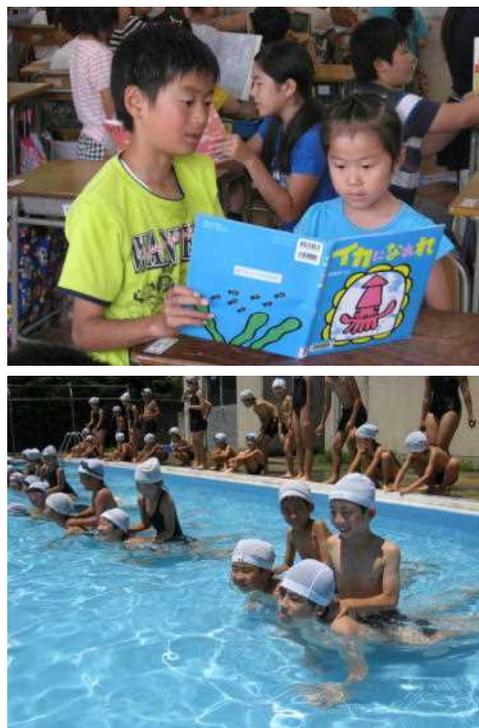


図5 1年生・2年生に教える様子

りして、意欲的に準備を進める姿が見られた。その姿から、先輩としてのプライドが芽生えていることがうかがえた。実施、当日はどの児童も、先輩として自信を持って教える姿が見られた。



図6 4年生・5年生に教える様子

どの学年への取り組みに対しても主体的に取り組み、事前の準備や練習等で自信を持って下級生の要請に応えようとしていた。そして、実施当日は、どの児童も、先輩として下級生を思いやる優しい態度や、プライドを持って、下級生に対応していた。

(6) 全取り組みに対しての振り返り

全学年への実践終了後に、全体を通しての振り返りを行った。その中でも、「下級生のうれしそうな顔を見て、こっちもうれしくなりました」「役に立ててよかった」など、自己有用感を感じていると考えられる記述が見られるとともに、「この後も、練習してがんばってほしい」「自分も最上級生としてがんばりたい」など、最上級生としての自覚を抱いたと感じられる記述も多く見られた(図7)。

また、実践後のアンケート結果では、「プロジェクトは全体的に成功だと思いますか」の問いに、100%の児童が「成功」「大成功」と回答し、十分な達成感、成就感を得ていることが分かった。「また教えたいですか」という問いに対しても94%の児童が「はい」「よろこんで」と回答し、多くの児童が、先輩としての自分に自信を持ってたということがうかがえた。6%の児童は、「内容による」と答えたが、「復習してからなら教えられる」としており、先輩としての意識は持っていることがうかがえた。

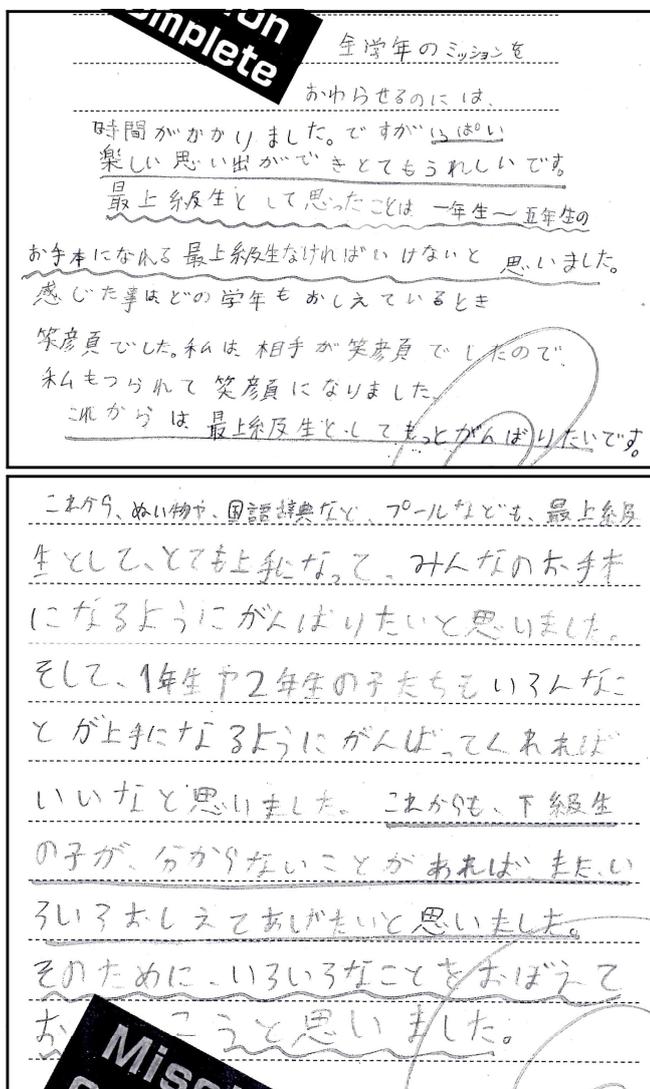


図7 児童の感想(全取り組み終了後の振り返り)

(7) 実践後の効果

各学年との実践後、学校生活の中でも6年生が下級生に声をかけたり、ふれあったりする場面をよく目にするようになった。

休み時間には、1年生や2年生と校庭で追いかけてっこをして遊んだり、休み時間終了時には「チャイム着席だぞ」と、下級生が早く教室に入れるよう促すなど、学校のリーダー的な発言や行動も見られるようになった。また、5年生が「休み時間に臨海学校のダンスを教えほしい」と自発的に6年生の教室に来て、一緒にダンスを踊るなど、下級生が6年生に親近感を持ち、リーダーとして頼れる存在として認知しはじめていることがうかがえた(図8)。

6年生からの聞き取りでは、「教えた時に仲良くなった子に、休み時間に、また、本読んであげたよ」など、先の実践がきっかけとなって、関わりが広がっていることが分かった。

さらに、下学年の教師からも、6年生に教えてもらったことで、ある児童は、その後の取り組みが意欲的になっているとの話を聞くことができた。下級生の学習意欲の向上にもつながったようである。こうした声も、6年生児童にフィードバックすることができ、自己有用感の向上とともに、最上級生としての行動や態度の向上につなげることができた。



図8 下級生とふれあう日常の様子

4 成果と課題

以上のように、本実践では、6年生が下級生のことを思い、その要望にマンツーマンで応えるという活動を通して、6年生一人一人に最上級生としての自覚をはぐくむことができたとともに、そのふれあいの中から得られた自己有用感を十分に味わわせることができたと考える。

また、この実践を通して、6年生が学校の全教師から最上級生として声をかけられたり、認められたりする中で、自覚だけではなく自信をも大きくできたことも、自己有用感をはぐくむ上で効果的に作用したと考える。

さらに、この実践の中で6年生が見せた下級生を思いやる態度や意欲的に取り組む姿は、下学年の児童にとって、数年後の自分の姿として映り、上級生へのあこがれを抱かせるという良い影響を与えることができたのではないかと考える。

本実践は、今年度で3年目を迎えた。かつて教えてもらった児童が、6年生となって教える立場になる場面が見られた。今年度の6年生は、本実践のスタート時から「下級生に教えてあげたい」という思いで学習を始めることができた。これは、教えてもらった経験

があり、いよいよ自分たちの番だということが自覚できていたからである。学年が上がるにつれて、上級生としての心構えが徐々にはぐくまれてきたことが明らかになった。今後も、この実践を続けることにより、全児童が学年が上がるごとに、上級生としての自覚を徐々にはぐくむことができるようになっていくものとする。そして、6年生では学校のリーダーとして、下級生の手本となる行動ができるようになっていくものとする。

課題としては、学校全体で毎年続けて取り組むためのシステム作りが必要とする。そのためには、各学年の年間指導計画の中への位置付けが必要である。また、6年生のマンツーマン指導が効果的である各学年の学習内容のさらなる模索も必要であるとする。